
妖精の神が生きる道

ユナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖精の神が生きる道

【Nコード】

N1817Y

【作者名】

ユナ

【あらすじ】

鉄骨につぶされて、転生することになった私。まあ、とりあえず一生懸命生きてみよう。あ、その前に修行だな。死なないためにも。当分フェアリーテイル関係ないです。ものすごい下手です。それでもいいという心優しい人は、読んで頂けるとうれしいです。

妖精の神が生まれる前（前書き）

下手な小説です。それでもいいという心優しい人は読んでくれると嬉しいです。

妖精の神が生まれる前

「危ない!!」

上から声が聞こえる。何が危ないんですか？そう聞こうとしたとき、何か大きいものが落ちてくるのに気がついた。鉄骨だ。避けなくては。頭では理解している。でも、怖くて動けない。逃げなくては。逃げなくては。

ドサッ

あ・・・れ・・・？からだか・・・う・・・ごけない・・・？

「女の子が鉄骨につぶされたぞ!」「誰か!救急車を!」

大丈夫。そんな簡単なことが言えない。なんで？なんで？そして・・・私は意識を手放した・・・どこかに引っ張られるような感覚を持ちながら。

「あれ・・・?」

何故、感覚があるんだろう。私は死んだはずなのに。

「おー、起きたか。」

「だれ・・・?」

「俺はイーリス！神だ！よろしく！」

私は、とうとう頭がおかしくなってしまったのだろうか。それとも、この目の前にいる人間の頭がイカれているからなのだろうか。いや、きつとそうに違いない。

「いや、違うから！お前の頭がおかしくなったわけじゃないし、ましてや俺の頭がイカレ

ているわけじゃないから！俺、本当に神だから！」

「はいはい、それで、自称神が私に何のよう？」

意味がないとゆうことだけは、絶対にないだろう。

「自称じゃない！って、話がずれたな。話を戻そう。お前は、鉄骨でつぶされた。本当は、記憶喪失だけですんでいたはずだったんだ。しかし、お前は打ち所が悪く、死んでしまった。そこで、お前にはフェアリーテイルの世界に転生してもらう。」

「え・・・マジ？」

「うん。マジ。」

「フェアリーテイルといったら、私が一番好きなアニメじゃないか！」

「ああ、あと、そこで生きるための願いや質問は、いくらでも受け付けるぞ！」

「えーと、それじゃあね、カードキャプターさくらのクロウカード全52枚をまずちょうだい。」

「了解。あ、でもさあ、」

「何？」

「俺が出来る転生は赤ちゃんからだから、これ、どう渡す？」

「ああ、それじゃあさあ、クロウカードを私の体内に取り込んで、能力系の魔法として使えないかな。ハッピーの「エーラ」みたいにさ。」

「それなら可能だな。んじゃ、これ。」

「これ、なに？」

出てきたのは、透明な、グミみたいなもの。

「ああ、俺は、道具以外のものは、こうやって渡すことにしているんだ。」

「ふーん。ま、どうでもいいや。いただきます。」

「で、他に欲しいものは。」

「めんどいから一氣に言うよ。念じたら、その通りのものが出来る能力。あと、治癒魔法。あと、フェアリーテイルの世界での語学の知識と、様々な魔法に関する知識。あと、身体能力は、最高レベルにまであげといて。他には、アースランドで1番の魔力。そのままじゃかなり危ないから、封印できる魔法もつけといて。あと、治癒のスピードを、格段に上げといて。それと、かなり正確な記憶力。それと、フェアリーテイルのアニメの知識は、放送されるたびに頭に入れさせといて。そのくらいかな。」

「そのぐらいつて・・・。」

「イリスが、私をあきれたような目で見る。まあ、多すぎたかもしれないな。ま、いつか。」

「ああ、あとおまけがもらえるぞ。」

「おまけ？」

「そ、おまけ。俺に会いたいと思いつながらねると、俺に会える。」

「ふうん。でも、何でそんなものがいるの？」

「能力を変更したかったりするだろ。その時のためだ。」

「ああ、あとさ、何で私の記憶つて、あやふやなの？」

「鉄骨につぶされたとき、軽い記憶喪失になったみたいだな。」

「へえ。」

「ああ、あと、お前の名前と容姿、どうする？」

「名前はルエ。名字はどうでもいい。容姿は目と髪の色は茶色。」

「了解。ああ、あと、これやるの忘れてた。」

「ああ、この透明なグミみたいなやつ、また出てきた。ま、食べよう。食べ終わったみたいだな。それじゃあな。」

「バイバイ。イリス。」

「言い終わった瞬間、私から光りが発せられ、そのまま意識を失った。」

妖精の神が生まれる前（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました！

妖精の神が産まれたとき（前書き）

前にも増して下手になってるーーーー！

妖精の神が産まれたとき

「うわああああああああん（いったゝい）」

「生まれたわ！」

「生まれたのか！」

「おめでとうございます。元気な女の子です！」

「あなたの名前はルナ。ルエ プローラスよ。」

「あゝ（へゝプローラスって名字なんだゝ）」

「あゝ（なんか、異様に眠い・

・・）」

「おい！起きろ！」

「あ、イーリス！」

「あのな、ルエ、俺、お前に謝らなくちゃいけないんだ。」

「ん、何？」

「転生の衝撃にお前が耐えられなくて、現実では眠り病みたいな状況になっちゃってしまっているんだ。」

「ふうん。どのくらい？」

「お前が産まれてから、2年と6カ月だ。」

「・・・うそーーーーーっ！」

「すまん・・・。」

「すまんじゃなーーーーーっ！」

「とゆうわけで、お詫びに、この空間で修行を許そうとおもった。」

「もういいよ・・・。」

「まあ、一応現実に戻すぞ。」

「じゃね・・・。」

妖精の神が産まれたとき（後書き）

読んでくれた人、ありがとうございました！！

妖精の神が目覚めたあと（前書き）

矛盾している・・・

妖精の神が目覚めたあと

「ちよつとまでや――――！！！」

あ、あれ？もしかして、現実世界に帰って来ちゃった？目さめた直後にさげんでた？

「ル、ルエ？」

この人はまさか・・・

「お母さん？」

この世界のお母さん、すみませーん。あのくそ神、今度会ったらだじゃおかんぞ。

「ルエ！目が覚めたのね！」

「お母さん……」

「あなた、2年と6カ月ほど眠ってたのよ！もう、起きないんじゃないかと思ったわ！」

「お母さん……苦しいよ……」

お母さん……力、強いよ。苦しいよ。マジで。

「あら、ごめんなさい。」

「でもね……会えて嬉しいよ。」

「ありがとう。あのね、ルエ、あなたに、2人、紹介したい人がいるの。」

「へー、だあれ？」

「1人はあなたと同じ年の女の子。1人は、あなたの弟よ。」

「へーってええええええええええええええええええええええ！」

「おどろいた？」

おどろかない人がいたら紹介してよ。

「……その2人の名前は？」

「弟がカイト・プローラス。女の子がティナ・ルミネーナよ。」

「ふーん。2人に会いたいな。」

「本当！？それじゃあ、今から会いに行きましょう！あ、でも、そ

の前に服をきがえましょうね！」
「はい。」

「それが、10年後に至上最強とつたわれた妖精の神とチームメイ
トとの出会いでした。」

妖精の神が目覚めたあと（後書き）

ここまで読んでくださり、ありがとうございます！

妖精の神と1人目の親友との出会い（前書き）

前よりは多少うまくできたかな・・・？

妖精の神と1人目の親友との出会い

洋服に着替えた私は、3つ隣の家に向かっていた。ティナとゆう名の女の子に会いに行く。同じ年らしいけど、精神年齢は私の方が上なんだよな……。仲良くできるだろうか。でも、その子が転生者だったらまだマシかな……。 (とゆう淡い期待をかけてみる。) と、考えているうちに、着いたみたいだ。

「おじゃましてーす。プローランスです。」

「あ、いらっしやい。おや、ルエちゃん、いらっしやい！ティナ！ルエちゃんが遊びに来たよ！」

「はい！」

そうやって来たの女の子は……

「(か、かわいい！)」

お人形みたいだった。マジで。

「初めまして。ティナ・ルミネーナです。」

「初めまして。ルエ・プローランスです。」

なんとなく、私に似ていた。そして、なんとなくこう思った。

「(この子は、転生者かもしれない……。)」

「よろしくね、ルエちゃん！」

「こっちこそよろしくね、ティナちゃん！」

「あらあら、すっかり仲良くなっちゃって。」

「ティナ、お部屋で遊んで来なさい。」

「わかった！ルエちゃん、お部屋いこ！」

「うん！わかった！」

―これが、妖精の神と1人目の親友との出会い。

妖精の神と1人目の親友との出会い（後書き）

感想、お願いします！

妖精の神と2人目の親友との出会い（前書き）

前の話と微妙に似ている・・・。

妖精の神と2人目の親友との出会い

「バイバイ、ティナちゃん！」

「ルエちゃん、バイバイ！また明日ー！」

すんごい楽しかった。何でだろうな。前は人と遊ぶより本とか読んでる方好きだったんだけどなあ。

「ルエ、どうしたの？」

「ううん。ちよつと考え事してただけ。」

「そう。それじゃあ、今からカイトに会いに行きましょうね。」

「はい。」

ぼてぼてと歩いていたら家に着いた。ここのどこにいるんだろう。そんなことを考えているとお母さんがドアを開けた。

「さあ、ここよ。」

入ると、ベビーベッドがあつて、その中に赤ちゃんがいた。目をぱつちりと開けて、「なんだなんだ」みたいな感じで私を見ている。

「（あれ？）」「何か、違う。」

「どうしたの？」

「ううん。何でもない。」

―これが、妖精の神と2人目の親友との出会い。

妖精の神と2人目の親友との出会い（後書き）

読んでくれてありがとうございました！出来たら感想お願いします！

妖精の神の母の日記（前書き）

お母さんの日記です。

妖精の神の母の日記

×月＋日

今日、私の子が生まれた。名前はルエ・プローランス。女の子だ。どんな子に育つのだろう。将来が楽しみ。

×月 日

ルエが産まれてから約1週間がたった。一昨日の昼に寝てから、今日の夜になっても起きない。さすがに寝すぎだと思つた私たちが医者に診せたところ、一種の眠り病だと言われた。治療法は分からないらしい。いつ、起きるのだろうか。

月×日

あの子が眠つてから、約5カ月がたった。近くに、ルエより1カ月遅れて産まれた女の子が引越してきた。ルエが起きたら紹介したい。ああ、あと、その子の名前はティナ・ルミネーナと言つらしい。

×月 日

あの子が眠り始めて丁度1年がたった。まだ、目覚める気配は一行にない。早く目覚めてね。

月 日

今日、ルエに弟が出来た。名前はカイト・プローランス。元気な男の子だ。この子には、眠り病にかかって欲しくない。それに、早くルエにも目覚めてもらいたい。

月 日

今日、やっと、やっと、ルエが目覚めた。カイトは不思議そうな顔をしていたけれど。

ただ、何故、「ちよつとまてや――――！！！」と叫びながら起きたのかしら。まあ、あの2人と仲良くしてくれればいいのだけれど。

妖精の神の母の日記（後書き）

ありがとうございました

妖精の神と2人の親友（前書き）

今回は、転生者3人をいつぺんに出しますよ！あ、イーリスも含めてオリキヤラ4人か。

妖精の神と2人の親友

「イーリス？あの問題発言はどうゆうことかなあ？」

「ただいま、イーリス君に質問（？）をしています。」

「ちゃんと説明します！だからその怖い笑いをしまってください。」

「ちゃんと説明しろよ。」

「まずは、カイト・プロランスから。お前が転生して約1年と2カ月ぐらいかな。間違つてある少年を殺してしまつて「また間違つて人殺したの？」ほつといてくれ！！それで、あの世界に転生させた。」

「何で私の兄弟なわけ？」

「なんとなく。」

「……… ドガッ 私の足蹴りがイーリスのおなかにク

リティカルヒットした音

「もう1人の転生者は？」

「テ……ティナ・ルミネーナです……。」

「やつぱりねえ。」

「え、きずいてた？」

「なんとなくだけどね。」

「「イーリス？どーしたの？つて、え！？」」

後ろを振り向くと。2人のお人形さんがいました。チャンチャン

「『チャンチャン』じゃないから！ルエちゃん現実見て！」

「おお。何故に考えることが分かった？」

「ティナは、読心術の能力をもらつたらしいからね。」

「ふむふむ。てか、君たち誰？」

「「今更！？」」

「おお、息ぴつたりだねー。」

ちなみに、今ここにいるのは私と、イーリスと、藍色の目と、シヨートカットの藍色の髪を持った女の子と、黒色の目と、少し長めの

黒色の髪を持った男の子。

「まあ、今の感じから推測するに、藍色の子がティナちゃん、黒色の子がカイト君かな。」

「「正解。でも、ちゃん（君）はいらないよ。」」

おお、またもや息ぴったり。

「まあ、お茶でも飲んでゆつくり話そうよ。」

「え、ここ、お茶とか飲めんの!？」

「うん。」

「と、ゆうわけで、イーリス、お茶とお菓子 さ、いこー。」

後ろでイーリスが「俺がお茶入れんのー!？」とかゆう叫び声をあげてたかも知れないけど、無視無視。さあ、お茶とお菓子だ

妖精の神と2人の親友（後書き）

次はみんなのもらった能力や前世の名前などを説明させちゃいますよ！・・・たぶん。

妖精の神と仲間達（前書き）

区別がつかない！特に、ルエとティナの区別が・・・。

妖精の神と仲間達

「おいしー。」ただいま、お茶とお菓子中。

「さて、さつきイーリスから聞いたと思うけど、僕とティナは転生者だ。姉さんも、そうなんだろう？」

「まあねえ。そう言えば、2人はどうして死んだの？これ（イーリス）が間違つて殺したつてのは聞いたけどさ。」

「私は通り魔に刺されて。」

「「うわぁ・・・」」

「僕は、重度の食中毒で。」

「「げえ・・・」」

「その口ぶり、初耳？」

「「うん。死に方なんて興味ないしね。」」

「ひどっ！」

「そう言えば、姉さんは？」

「あれ？死に方興味ないんじゃないかなかったつけ。」

「私たちのしか聞かないなんて、不公平じゃん。」

「そっか。私は、鉄骨につぶされて。」

「「グロッ！」」

思いつきり退かれた。

「ひどいなあ。2人のだって、充分グロいじゃん。」

「「そうだけどさあ。」」

にしてもあんな達、息びったりだね。前世は双子か？

「うっん。赤の他人。」

「ふーん。そう言えば、何でティナは考えてることが分かるの？」

「読心術貰ったの。前にカイトが言ってなかったつけ。」

「・・・そう言えば、言ってた。」

「「はぁ・・・」」

何よその、2人そろつたあきれ顔は。

「さあ、次は能力の説明と行こうじゃないか！」
「イーリス、どっからわいてきた。」
「ここは本来俺の仕事場みたいなのところなんだが・・・」
「私が貰ったのはカードキャプターさくらのクローカードやら何やらかんやら。詳しい話はこれ（イーリス）から聞いてください。」
「スルーしないで！しかも、実行しないで！」
「いいじゃん。別に。」
「「そうそう。」」
「ひどいつ！しかもカイトとティナまで！」
「僕は、選択した魔法を無力化する魔法。」
「スルーすんなあ！」
「私は、水の造形魔法。」
「・・・（泣）」
「「イーリス、お茶お代わり。」」
「・・・了解・・・」
「あ、そーだ。2人の前世の名前は？私は、世崎 友那。」
「ふーん。ティナは友那って名前なんだ。」
「僕は清木 海斗。」
「カイトはそのまんまなんだね。」
「うん。考えるの面倒くさかったからね。」
「へえ。私は、神月 神奈。」
「「個性的な名前だね。」」
「ねえ、2人とも。」
「「なに？」」
「「ここではさあ。その名前で呼び合おうよ。姿だってそうなんだしさあ。」」
「「賛成！ナイスアイデア！」」
「とりあえず、そろそろ帰った方がいいぞ。」
「「「なんで？」」」
「そろそろ夜明けだからな。」

「『それを早く言え!』」

「じゃーね、また夜にね。友那、海斗。」

「うん。」

そして、私たちは意識を失った。

妖精の神と仲間達（後書き）

次は、みんなのプロフィール書きたいなあ。

妖精の神の現実（前書き）

短い！しかも、プロフィールじゃない！

妖精の神の現実

「くわああああ。」

「あら、ルエ、おはよう。」

「お母さん。おはよう。」

あんまり寝た感じしないなあ。そりゃあ、一晩中話し込んでたんだけどさ。

「あ、姉さんおはよう。」

「うお。カイト、おはよう。」

「さあ、朝ご飯を食べましょう。」

「はい。」

〜テイナ宅〜

「ティナー。遊びに来たよー。」

「あ、ルエとカイトー。来てくれたのー？」

「ん。」

「さ、ルエちゃんにカイト君。ティナの部屋に行きましょう。」

「はい。」

「何するー？」

「じゃあさあ、かくれんぼは？」

「……ティナって意外と子どもっぽいんだね。」

「ほつとしてよ！それにさ、たまには子どもらしい行動とらないと、お母さん達が心配するじゃない！」

「……『行動をとる』なんて言葉を使っている時点で心配され

と思う。」「

「ひどいよお・・・（泣）」

「しょうがないな。かくれんぼでいいよ。」

「やった！」

「その代わり、鬼はティナね。」

「はい。」

くかくれんぼ終了・夕方く

「ルエ、カイト、帰るわよ！」

「はい。ティナ、また明日！」

「明日！」

妖精の神の現実（後書き）

読んでくださって、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1817y/>

妖精の神が生きる道

2011年11月23日17時46分発行